

上代語「かなと、かなづ」考

井 手 至

万葉集に、門の意を表わすことばとして、「かなと」がある。「かなと」は

①さを鹿の伏すや草むら見えずとも子ろが可奈門よ行かくし吉よも
(卷十四・三五三〇)

②可奈刀田を荒垣間見ゆ見日が照れば雨を待とのす君をと待とも
(卷十四・三五六一)

③防人に立ちし朝明の可奈刀出にた離れ惜しみ泣きし子らはも
(卷十四・三五六九)

④金門にし人の来らば夜中にも身はたな知らず出でてぞ逢ひける
(卷九・一七三九)

⑤常世にと 我が行かなくに 小金門に 物悲しらに 思へりし
我が子の刀自を……
(卷四・七二三)

⑥初瀬川夕渡り来て我妹子が家の門かたに近づきにけり
(卷九・一七七五)

の歌の中に、その用例が見いだされる。①の「可奈門」の「門」

は、一字一音式の仮名書きの中に交えられた表語的正訓字と考えられる。^{注1}また、②の「かなと田」は門田の意。③の「かなと出」は門出の意であろう。

一方、万葉集には、門の意の「かど」も用いられており、

……鳴く声を 聞かまく欲りと 朝には 可度に出で立ち 夕
には 谷を見わたし……
(卷十九・四二〇九)

ほととぎすまづ鳴く朝明いかにせば我が加度過ぎじ語り継ぐま
で
(卷二十・四四六三)

腰細の すがる娘子の 其の姿の さらさらしきに 花のごと
笑みて立てれば 玉梓の 道行き人は おのが行く 道は行

かずて 呼ばなくに 門かたに至りぬ……
(卷九 一七三八)

などは、その例である。この「かど」と先の「かなと」との関係については、「かなと」の縮約形が「かど」(kanato>kanoto>kado)

であると考えてよからうと思つ。ところが、「かなと」が、なぜ門の意を表わすのかという点になると、なおはっきりとしない。従来、「かなと」については、

記紀歌謡に、

⑦大前小前宿祢が加那斗蔭かく寄り来ね兩立ち止めむ

(記、下・八一)

⑧大前小前宿祢が訶那杜蔭かく立ち寄らね兩立ち止めむ

(允恭紀四年・七二)

とあり、この場合の「かなと」が記紀の前後の文脈(第二節④参照)から立派な門構えを思わせることや、先の万葉集の④⑤の歌に「かなと」を「金門」と記していることなどから、「かなと」の「かな」を「金」の意に解し、「かなと」は金門の意、つまり、金属で装飾した立派な門とか、金属で補強された堅固な門、或いは扉に金属の錠のついた門などと解釈されることが多かったが、このような通説については、「かなと」の語が、東歌に見える①②③のような場合にも用いられている点から当たらないと見てよいであろう。最近の『角川古語大辞典』にも、

金のように堅固な門、金具を取り付けた門などの意とする説があるが、粗末な民家の入り口をも含めていうらしく、必ずしも適切でない。^{注2}

とあるのに従うべきである。

「かなと」については、右のほか、折口信夫が雑木をよせて造った扉をかなとと言ったのが、遂にほめ詞として、金の戸と感ぜられる様になったのだ。^{注3}

といい、また、松岡静雄が

カ(日)ノ(助語)ト(門)の転。日光の入口といふ意。^{注4}

と説いているが、いずれも臆説の域を出ないものと認められる。

そこで、それでは、「かなと」の語源について、いかに考えるべきであるかということになるが、私は、この問題を考えるに当って、

まず参考になるのは「かなづ」という動詞ではないか、「かなと」は「かなづ」と結び付けて解けるのではあるまいか、と考えるのである。

二

「かなづ」は、楽器を「かなでる」などの形で今でも用いられる「かなでる」に対応する古典語であるが、この語は、上代には、後世のように楽器を「かなづ」(他動詞)の形では用いられなかった。それは、むしろ舞踊を表わす語(自動詞)として用いられた。用例を見よう。上代から平安朝にかけて次のような注意すべき例がある。

④於是穴穗御子、興軍團大前小前宿祢之家。爾到其門時、零大水雨。故、歌曰

大前小前宿祢がかなと蔭かく寄り来ね兩立ち止めむ

爾其大前小前宿祢、拳手打蔭、舞訶那伝自阿下三歌参来。

(記、下)

⑤なかつかさの宮、御かはらけとりてまひ給へり。右のおとどにまいる給。^(ママ、以下同じ)みこはおち宮たちの御ぎのしもにつき給ぬ。かくて御かはらけくだるほどに、右のおとど「こしががまりたるおきなをのみ、かなでさせ給て、ただにてやはやみ給なんずる」との給へば、源中納言たちてまひ給。

(尊経閣文庫本、宇津保、蔽開上)

①の例では、「舞ひかなで」と用いられ、動詞「かなづ」が「舞ふ」と共に用いられているが、⑤の例では、「かなでさせ給」が「まひ給」に対応する動作を表現したことはとして用いられている点が注

意せられる。名義抄に、「舞マフ、カナツ」（仏上）と見えるのもそれであろう。

それでは、「かなづ」は、舞いのどのような動きを言い表わしたことばなのであろうか。舞踊を表わす動詞には、「まふ」「をどる」などがあるが、「かなづ」については、④に「手を挙げ膝を打ち舞ひかなで」とあることを考え合わせると、体の回転する動きに注目した「まふ」、跳躍する動きに焦点をあてた「をどる」に對して、「かなづ」は、手や腕などの屈伸する動きにかかわりをもつ語であったのではないだろうか。その点からは、平安朝後期の歌に

①ひろまへのには火の光あきらけくかなづる袖を見るぞうれしき
(堀河百首・冬、隆源)

と見え、そこに「かなづる袖」と言っていることが注意される。ここでは「袖」の動きに注目して、それを「かなづ」と表現しているからである。

また、平安朝末期の『今昔物語集』には

②尼君共ノ四五人許、極ク舞ヒ乙テ出来タリケレバ、木伐人共
此レヲ見テ、恐テ怖レテ、「此ノ尼共ノ此ク舞ヒ乙テ来ルハ、
定メテヨモ人ニハ非ジ、天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラム」
ナド思テ見居タルニ、此ノ舞フ尼共、此ノ木伐人共ヲ見付テ、
亦寄ニ寄来レバ、木伐人共極ク怖シトハ思ヒ乍、尼共ノ寄来タル
ルニ、「此ハ何ナル尼君達ノ此クハ舞ヒ乙テ、深キ山ノ奥ヨリ
ハ出給タルゾ」ト問ケレバ、尼共ノ云ク、「己等ガ此ク舞ヒ乙
テ来ルバ、其達定メテ恐シ思ラム。……」ト云ニ……

(卷二八、二八話)

③「泥障一懸求メテ持来レ」ト云ヘバ、即チ、求テ持来ヌ。「其

レヲ結ヒテ聖人ノ頸ニ懸ヨ」ト云ヘバ、云フニ随テ、頸ニ打懸
ケツ。聖人、糸苦シ氣ナルルヲ念ジテ、左右ノ肘ヲ指延ベテ、
「古泥障ヲ纏テゾ舞フ」ト云テ、二三度許乙テテ、「此レ取リ
去ヨ」ト云ヘバ、取り去ケツ。竜門ノ聖人、「此ハ何ニ乙テ給
フゾ」ト恐々ツ問ヘバ、答云ク、「……一人ノ小法師、泥障ヲ
頸ニ懸テ、『胡蝶々々トゾ人ハ云ヘドモ、古泥障ヲ纏テゾ舞フ』
ト歌テ舞シヲ、好マシト思ヒシガ、年来ハ忘レタリツルニ、只
今被思出タレバ、其レ、遂ムト思テ乙テツル也。……」ト云テ

(卷十二、三三話)

④「高祖ヲバ、今日、必ズ可討被討キ也。其レヲバ何カ可謀キ」
ト議シテ、「忽ニ此ノ座ノ中ニシテ舞ヲ可奏シ。項莊、其ノ舞
人トシテ劔ヲ拔テ乙テ、其ノ座ノ辺ヲ渡ラム間、高祖ノ所ニ至
ラムニ、乙ツル様ニシテ高祖が頸ヲ可切シ」ト謀ツ。其ノ後、
如此ク舞ヲ令奏ム。

(卷十、三話)

などの例がある。このうち、③は、先掲の①と同じように「舞ひかなづ」の形で「かなづ」が「舞ふ」と共に用いられた例、④の第三例「かなでつる」は、直前の「舞ひし」に該当することばとして用いられた例である。また、注意すべきは、③の第一例にあっては、「左右の肘を指し延べて……二三度許りかなで」たとある点で、左右の肘の動きに注目していることがわかる。④の第一例でも、「劔を抜きてかなで」たとあるので、手に劔を持って舞ったことになるから、その舞いは当然、劔を持った手や腕などを曲げたり伸ばしたりする動きを伴う舞いであったであろう。

特に、『今昔物語集』では「乙」字を「かなづ」の表記に用いているが、「乙」は屈曲の意をもつ字である。このことは、『名義抄』

に、彎曲した形を示す「ひ」や「し」を「カナツ（声点は平平上）」と訓むことともに、動詞「かなづ」の意味用法を考える際に無視できないものと思われる。すなわち、自動詞「かなづ」は、舞踊について用いられ、体（特に上肢）を曲げたりくねらせたりする動作を言ったものかと推察される。

また、「かなづ」は他動詞としても用いられるが、

⑩琵琶を取り寄せて姫君に、たてまつるとて、「まづ猿をつなげ」と、ささめくも、例のあらはに、教へられて、とり寄せて、い

としどけなくゆるゆるとつなぎ給ふ。又さし寄りて、「その次

には奏でを」と眩してつくなれば、「颯、笛吹く、猿、奏つ」と

と弾き給ふを、母代、いとめでたう思ゆるを、え堪えず心も澄

みたちて、末に待ち取りて……（内閣文庫本、狭衣、卷三）

⑪湖上に船を望めば、心、興に乗り、野庭に馬をいさめて、手、鞭をかなづ。

（尊経閣文庫本、海道記、序）

の例のうち、⑩の例では、琵琶を「かなづ」が琵琶を「ひく」とほぼ同義で用いられていることがわかる。ここでも、やはり、「かなづ」が楽器の演奏に際して上肢を屈曲させる動きについて用いら

れていることは自動詞の場合に同じい。この点、⑪の例では、「かなづ」が特に鞭を振るため、上肢を動かすことを表わす動詞として用

いられていることがはっきりしている。すなわち、「鞭をかなづ」

は、腕を曲げたり伸ばしたりする鞭さばきについて言われたものであるが、それは、⑩などのような楽器演奏の際の上肢の動きにも、

そのままではまるのである。

かくて、以上の考察から、早く『歌舞品目』が、「乙」について

今時、凡奏樂をかなづと称すれども、もと手を以て舞ふの称な

り

（巻五、上）

と記し、また『大言海』が「乙」字は舞う手の形を表わす、としたことを、妥当な見解として、ほぼ立証することができたかと思う。

これを要するに、「かなづ」は、他動詞の場合も含めて、上肢をくねくねと屈曲させる動きについて言った語だということができるであらう。

三

さて、「かなづ」という語は『名義抄』に存在しないが、その縮約形と推察される「かど」は多く見いだされる。

「稜カド」（法下）はその一例であるが、声点は平上にさされてい



（第一図）

る。前節の考察のように、「かなづ」は屈曲を伴う動作であるから、そのくねくねとした軌跡はやはり角を有することになる。ここに、「かど」と「かなづ」とは、ともに相通じるさまかたちを意味する要素を持ち合わせていることに気づく。「かど」が「かなと」の縮約形だとすれば、その、「かなづ」の語幹「かな」に該当する

「かな」の部分は「くなと」の「くな」とも関連し、折れ曲ったさまを意味する語基で、「と」は所の意だといふことができよう。

かくして、語基「かな」の存在を認め、それを折れ曲ったさまを言い表わす形状言であると規定することができるとすれば、私は、鉋かなを意味する「かな」もまた、同じ「かな」を造語成分とする語だと思ふのであるかと思ふ。鉋の意の「かな」は、万葉集にも

真鉋まかなもち弓削の河原の埋れ木の頭はるましじき事にあらなくに

(巻七・一三八五)

の用例があり、正倉院文書などにも例が見られる。

十合合飲刀子柴鞘一口刀子六口、加奈一、並黒緒把……

(古文書、巻四、天平勝宝八歳六月二日)

採正殿心柱祭。……鎌二張、小刀子一枚、鉋一枚……

(延喜式、巻四、神祇四、伊勢太神宮)

ところで、上代の鉋は、今日の台鉋とは異なり、いわゆる槍鉋の類で、反りをもった細長い鉄棒の先に槍の穂先のような刃をつけたものである。(第二図参照)『倭名抄』にも

鉋加奈(声点は平声)。弁色立成用。曲刀二字。平木器也。

(神宮文庫十卷本、巻五)

と記すのはそのためである。つまり、その槍鉋風の「鉋」が上代に



(第二図)

「かな」(第一音節は平声でやはり低く発音されることに注意)と呼ばれたのは、その折れ曲った形に注目したからであろうと思う。すなわち、それは、「曲刃まかな」の意で「かなな」と呼ばれた(「刃」を「な」と称することは「刀かた」などに例あり)わけであるが、その第二音節の母音が脱落し、縮約をおこして(kanana/kanna/kana)、「かな」に変化したものと思われる。したがって、「鉋」は前掲のように「加奈」(古文書、四)と記される一方、『倭名抄』には「鉋カレナ」(僧上)の形も見いだされる。

四

孝徳紀の歌謡の

婀娜あなな紀つけ我が飼ふ駒は引出せず我が飼ふ駒を人見つらむか

(白雉四年、一一五)

に見える「かなき」については、『延喜式』祝詞の

如此出波、天津宮事以良、大中臣、天津金木乎、本打切末打断

(六月晦大赦)

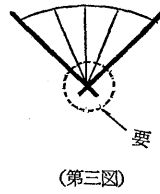
良、千座置座爾置足波意良……

の中の「天つ金木」と同様に、金属のように固い木と解されているが、元来は、「曲木まき」の意で、首かせにもなるような形の枝ぶりの樹枝を意味する語であったかも知れない。「かなき」の「かな」は、この場合、折れ曲ったさまをいう形状言であったか。「かなき」に「鉋」字が宛てられるようになり、声調も第一音節が上声で高く発音されるように変れば、それはもう「かなき」の「かな」に「金」(声調は上声)の意が賦与されたことを意味する。因みに、『倭名抄』には、

鉋加奈かな(声点は上上七)以鉄束くわ頸也 (神宮文庫十卷本、巻五)

とあり、それがすでに「金木」の意に解されていたことを示す。
『名義抄』にも、「鉗カナキ（声点は上上七）（僧上）とある。

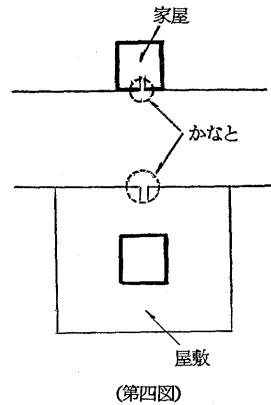
なお、上代語としての確例はないが、要の意の「かなめ」も、元
来は、たとえば、第三図のように、扇の骨の曲がる部分をさすところ



から「かな目」と称されたのであって、決して、骨を綴り合わせる
ためにはめこんだ金目（くまび）の意ではない。ましてや「蟹目」
の転ではなかつたであろうと思われる。地鎮めの「かなめ石」も、
現今では特定の地域のの石（たとえば水戸の鹿島神社の境内の要石
など）が有名だが、本来は、領域の境目をなす四隅（その角が要所
である）に据えられた境界石であつたらから、そう呼ばれたものか。

以上、「かなづ」の語幹「かな」と共通する語基「かな」を含む
「稜」（かど）（かなと）、「鈍」（かななかなな）、「かな目」などの各
語について考察を進めてきたが、その結果から見ると、「かな」は折
れ曲つたさまを言い表わす形状言だと認めてよいであろう。

そこで、第一節に掲げた門の意の「かなと」についても、右の考
察結果に照らして、次の結論を導き出すことができるように思われ
る。すなわち、「かなと」は、「曲門」の意（「と」は「門」の意と
解される）で、曲り角をなす戸口・門を意味することばだといふこ
とにならうか。それは、具体的には、道路など、外部と家・屋敷と
の間の出入口をなす狭い通路をさすことになる。（第四図参照）



『名義抄』では、門の意の「かど」に、勿論「門燎カドヒ（平平×）
（仏下末）のように、平平の声点をさしたものがあり、これが元の
形かと思われるけれども、院政期には、「かど」の第一音節を高く
発音するのが普通であつたらしく、「門カド（上平）（法下）、「關カドモ
リ（上平上平）」（法下）、「門舎カドヤ（上上七）」（法下）などのように、
第一音節に上声をさしたことが多く見られる。門の意の「かど」
が、院政期頃までに、稜の意の「かど」（声点は平上）と弁別され
るようになり、声調を異にしていたことを示すものといえよう。

注1 拙稿『万葉集仮名書き諸巻における正訓表記語彙について』『人文
研究』二二卷二分冊、昭和四十六年二月。

注2 中村・岡見・阪倉『角川古語大辞典』一、昭和五十七年、八一四頁。

注3 折口信夫『万葉集総釈』七（卷十四）、昭和十一年、二二六頁。

注4 松岡静雄『日本古語大辞典』語誌篇、昭和四年、四三三五頁。

注5 『体源抄』に、「次こぎの下には、鼈笛吹く（猿かなづ）いなごま
ろは、拍子打つ きりぎりすは、鉦鼓打つ」とある。